

‘Get’-受動文に見られるいくつかの特性について

岩 本 弘 道*

On some peculiarities of English ‘get’-passives

Hiromichi IWAMOTO

Abstract

English has two kinds of passive constructions: *be*-passives and *get*-passives. Traditionally both constructions have been considered as the same one, with the *get*-passive treated as a mere stylistic variant of the *be*-passive. But closer investigation reveals that the two constructions differ syntactically and semantically. This paper attempts to elucidate their syntactic and semantic differences and to find the adequate analysis. First it is argued that *get* in the *get*-passive is not an auxiliary verb like *be* in the canonical *be*-passive. Then following Haegeman (1985), we assume a small clause analysis of the *get*-passive and offer some supporting evidence for her analysis. We have a closer look at some of the peculiar syntactic and semantic restrictions on the *get*-passives which are not involved in the *be*-passive, and try to show how they are explained under the small clause analysis. Finally it is shown that despite the different syntactic structures of the two constructions, essential syntactic properties are the same in both of them, and that with respect to the observed peculiar semantic restrictions on the *get*-passive, the possibility is suggested that they can be explained by the so-called ‘Affectedness Constraint’.

0. はじめに

英語の受動文には、(1)に見られるように、通常の「be+過去分詞」からなる‘be’-受動文の他にもう一つ「get+過去分詞」の形態をとる‘get’-受動文と呼ばれるものがある。⁽¹⁾

- (1) a. John was killed in an accident.
b. John got killed in an accident.

この二つの受動文は、見ての通り動詞が *be* か *get* かという点以外ほとんど同じ形態をしているので、これまでしばしば同じ構文として扱われてきた。例えば、‘get’-受動文は‘be’-受動文の単なる「口語的な形式ではない形」であり文体上の変種にすぎないとして、‘be’-受動文と並列して説明する文法書も多い。

両構文の類似点をもう少し詳しく述べれば、表面上の類似点としては少なくとも次の三つがあげられる。

1. どちらの構文でも主動詞には受動態形態 *-en*

が現れる。

2. (一見) 基底での主動詞の目的語が表層主語となっている。即ち、主動詞の目的語が上昇 (promotion) を受けている。

3. *be* も *get* もほとんど意味を持たないという点で、どちらも「助動詞的」である。

しかしながら、こうした表面的な類似にもかかわらず、‘be’-受動文と‘get’-受動文は統語的にも意味的にも異なっている。

本稿では以下、‘be’-受動文と‘get’-受動文における統語的・意味的相違点を考察し、統語的には、(1) *get* は語彙的動詞であり、(2) したがって、D 構造で複文構造をとること、(3) ‘be’-受動文と同じく、‘get’-受動文も形容詞受動と動詞受動を持つことを見ていく。さらに‘get’-受動文の方が‘be’-受動文よりもそこに生起できる受動分詞により厳しい制限が見られること、そうした受動分詞への制限はいわゆる「被動性の制約」に類するものであることを述べていく。

1. get は補文をとる語彙的動詞である

まず第一に, 'get'-受動文に現れる get が統語的に be のような助動詞ではなく, 語彙的動詞 (lexical verb) であることが次の事実からわかる。

まず, do, have, be, その他の法助動詞とは異なり, get は「否定辞縮約」(Not-Contraction) が適用されず, 'get'-受動文の否定文は「do による支え」(Do-Support) を必要とする。

- (2) a. He hasn't left the house.
b. He wasn't killed.
(3) a. *He gotn't killed.
b. He didn't get killed.

次に疑問文において get は「主語一助動詞倒置」(SAI) を受けない。ここでも助動詞の do が必要となる。

- (4) a. Has he left the house?
b. Was he killed?
(5) a. *Got he killed?
b. Did he get killed?

第三に, 動詞句削除・省略 (VP-ellipsis) 構文では助動詞が省略部分の直前に無くてはならないが, get は他の助動詞と異なりこの位置に生起できない。したがって 'get'-受動文で動詞句削除が起こる場合にも助動詞の do が必要となる。

- (6) a. John has left the house and Mary has too.
b. John was killed in an accident and Bill was too.
(7) a. *John got killed in an accident and Bill got too.
b. John got killed in an accident and Bill did too.

こうした事実は, get が例えば次の like と同じように語彙的動詞であることを示している。

- (8) a. *I liken't Chinese food.
b. I don't like Chinese food.
(9) a. *Like you Chinese food?
b. Do you like Chinese food?
(10) a. *John likes playing baseball, and Bill likes too.
b. John likes playing baseball, and Bill does

too.

さて以上ことから get が語彙的動詞であることは明白である。すると, 単文構造をとる 'be'-受動文とは異なり, 'get'-受動文は補文をとり, 複文構造を成すという可能性が考えられる。

実際, get は (11) の 'get'-受動文に対応する (12) のような受動分詞を主要部とする小節 (small clause: SC) を補文にとる構造をとることが可能なことから, こうした分析の可能性は十分にあると見てよいだろう。

- (11) His girlfriend got invited to the party.
(Haegeman 1985)
(12) John got [_{sc} his girlfriend invited to the party].

このような get が小節を補文とする構造にはさらに次のようなものがある。

- (13) a. John got [his feet wet].
b. John got [his girlfriend in trouble].
c. John got [his motion in].
d. John got [his students working on another topic].
e. John got [his students to work on another topic].
(Haegeman's (11))

これらは get の使役構文とも呼ばれるものである。そしてこれらの構文は, 全てそれぞれ次のような対応する自動詞構文を持つ。

- (14) a. George got very wet.
b. George got in trouble.
c. George got in.
d. The students got working on another topic.
e. The students got to like linguistics.
(Haegeman's (21))

これはちょうど次のような「使役動詞一能格 (ergative)・反使役 (anti-causative) 動詞」交替を示す動詞と同じである。

- (15) a. The enemy sank the boat.
b. The boat sank. (Haegeman's (33))

Haegeman は, こうした get の用法が (15) の sink の対に似ていることに注目し, Burzio (1981, 1986) に

従って, get も sink のように「使役動詞-能格動詞」の対を成すと考えた。そして, 'get'-受動文を使役動詞の get の能格動詞ヴァージョンとして分析することを提案した。

本稿では Haegeman (1985) に従い, (a) get は小節を補文にとり, それに「結果」(Result)という θ -役割を与える, (b) get は「非対格動詞」(unaccusative verb)であり, 格付与能力がない, と仮定する。そうすると, 'get'-受動文では, get の補部である小節自身が受動文の小節であることになる。Haegeman によれば, (11) のような 'get'-受動文の D 構造は次のように仮定される。

- (16) a. [_{IP} [_e] INFL [_{VP} get [_{SC} [_e] invited his
非- θ 位置 RESULT
girlfriend]]] (D 構造)
b. [_{IP} [_e] INFL [_{VP} get [_{SC} [_i] [his girlfriend]_i
no-Case
invited <sub>t_i]]] (派生途中)
c. [_{IP} His girlfriend_i INFL [_{VP} get [_{SC} _{t'_i}
NOM Case
invited _{t_i]]] (S 構造 (=11))}</sub>

(16a) の D 構造で受動分詞の目的語である名詞句 his girlfriend は, 通常の 'be'-受動文の場合と同じく, 格を付与されるべく, まず小節の主語の位置へ移動するが, 小節は屈折辞 INFL を含まず, get にも格付与能力がないために, 格を付与されないので, この名詞句はさらに主節の主語の位置である IP の指定部へと繰り上げられ, そこで主節の INFL から主格 (Nominative Case) を付与される。一方 (12) のような他動詞としての get の使役構文の派生は次のようになると仮定される。

- (17) a. [_{IP} John INFL [_{VP} get [_{SC} [_e] invited his
AGENT RESULT
girlfriend]]] (D 構造)
b. [_{IP} John INFL [_{VP} get [_{SC} [_i] [his girlfriend]_i
ACC Case
invited _{t_i]]] (S 構造 (=12))}

この場合, 小節自体は受動文であることには変わりないが, (11) の場合と異なり, get が小節の主語の位置に移動した名詞句に目的格/対格 (Accusative Case) を付与できるので, それ以上移動することはないし, そもそも他動詞の get は D 構造で「動作主」(Agent) の

主語を必要とするためにそうした移動の可能性は初めから存在しないことになる。

このような分析を仮定すると, 結局は 'get'-受動文も補文として本質的に 'be'-受動文と同じ構造を持つことになり, 両構文は統語的に, 少なくとも受動分詞に関しては, 違いがないことを予測する。しかしながら, 実際には 'get'-受動文の方が 'be'-受動文よりもその使用が遥かに制限されていることが知られている。

ここで簡単に, 'be'-受動文には見られない 'get'-受動文の特徴をまとめておくことにしよう。さて 'get'-受動文に特有な性質としてはしばしば次のような事実が指摘されている。

1. 'get'-受動文はくだけた文体, 口語表現に属し, しばしば行為者が明らかでないときに用いられる。したがって, 動作主を表す by-句を伴うことは稀である。
(18) a. The work finally got done despite a lot of difficulties.
b. ?*The work got done by Tom.
c. The work was done by Tom.

2. 'get'-受動文では主語が「ある影響・変化を被ること」が示される。またその文の内容が主語または話者にとって不利・有利であることを含意する。したがって, 主語が特に変化や影響を被らない場合には不自然になる。cf. R. Lakoff (1971)

これが正しければ, 'get'-受動文はいわゆる「被動性の制約」(Affectendness Constraint) に従うということになる。すると 'get'-受動文で用いられる動詞類は, その他の「被動性制約」に従うとされる構文である受動名詞句 (passive nominals) や中間態構文 (middles) に生起する動詞類に一致するはずである。が事実はその単純ではない。

3. 動作主指向の副詞句 (agent oriented adverbs) は, 一般に 'get'-受動文では主語を修飾する。一方, 'be'-受動文では一般に by-句によって表わされる動作主の行為を修飾することになる。

- (19) a. Mary got shot on purpose.
「メアリは自分の意志でわざと撃たれた」
b. Mary was shot on purpose (by somebody).
「誰かがわざとメア리를撃った」

ただし, 'get'-受動文でもこうした副詞句が動作主の行為を修飾する場合もある (おそらく, 表層の主語が無生物である場合であろう)。cf. R. Lakoff (1971)

また、'get'-受動文では「理由を表す副詞句」(rationale clause)は主節の主語を修飾し、「自ら~されるようにしむける」という意味になる。

- (20) a. *He got arrested to prove her innocence.*
 b. **He was arrested to prove her innocence.*
 Cf. *He was arrested (by the police) to prove their efficiency.*

これに関連して、受動文の命令文には get が多用されるという事実もある。これも get の主語に(それが有生物の場合には)動作主性があると考えられるからである。

4. 'be'-受動文で「状態」表す場合と「動作」を表す場合があるが、'get'-受動文は「動作」しか表さない。例えば、次の文では最初の was shot は「状態」を表しているが、二番目の was shot は「動作」の解釈となり、こちらの方だけ 'get'-受動文に置き換えることが可能だという。

- (21) *The police say the man was/*got shot when they found him, but they don't know when he was/got shot.*

しかしながら、これは 'get'-受動文自体というよりも、むしろ get が起動動詞であることに起因するとしてもよいと思われる。何故なら、こうした状態変化の解釈は 'get'-受動文に特有なものではなく、get が通常形容詞を補部とする場合にも観察されるからであり、このことは「get+形容詞句」と「become+形容詞句」に見られる差異についても当てはまる。become と違い、get は「永続的状态」を表す形容詞とは相入れない。

- (22) a. *She became tall./She became famous./She became pretty.*
 b. **She got tall./*She got famous./*She got pretty.*
 (23) a. *She became old./She became angry./She became tired./ ? She became excited.*
 b. *She got old./She got angry./She got tired./ She got excited.*

本稿では以下これらの 'get'-受動文に特有とされる諸特性について検討して行くが、その前に、この分析の予測のうちの一つである、'be'-受動文と同じく 'get'-受動文にも「動詞受動」と「形容詞受動」の二種類の受動態が可能であるということについて触れてお

きたい。

2. 'get'-受動文と形容詞受動

前節で見たように、'get'-受動文の get は語彙的動詞であり、その分析には複文構造を仮定する根拠がある。さて、Haegeman の 'get'-受動文の分析では、受動分詞の部分に関しては 'be'-受動文との間に本質的な違いはないとされるために、両構文は受動分詞に関しては統語的には同じ振舞いをするのが予測される。

2.1 さて、'be'-受動文については、統語的観点から「動詞受動」(verbal passive)と「形容詞受動」(adjectival passive)の二種類があることはよく知られたことである。そこで、まず形容詞受動と動詞受動の違いについて Wasow (1977)を参考にまず見ておくことにしよう。形容詞受動とは、過去分詞が語彙部門(Lexicon)の中で語彙規則で形容詞として派生されるもので、従って、一般の形容詞と同じ分布を示すものである。その場合、いわゆる受動文の主語は D 構造で始めから主語の位置に生成される。一方、動詞受動の過去分詞は、D 構造で動詞として語彙挿入され、それから統語変形によって派生されるものである。このように受動分詞を二種類に分けることで次のような予測が成り立つ。

形容詞受動とは語彙部門において「形容詞受動形成規則 (Adjectival Passive Formation rule: APF)」によって派生される形容詞で、D 構造において動詞ではなく形容詞として語彙挿入されるものである。一方、動詞受動は対応する能動文に近い D 構造を基底形として、名詞句移動という統語変形によって派生されるものである。cf. Levin-Reppaport (1986).

まず意味的に見て、動詞受動は「動的解釈」(dynamic reading)がなされ対応する能動態を持つが、形容詞受動は「結果・状态的解釈」(stative reading)となり、対応する能動態を持たないとされる。cf. Huddleston (1971)

- (24) a. *The vase was broken.*
 b. *The vase was broken by John.*

一般に (24a) のような受動文は「その花瓶は壊された」という「動的解釈」と「その花瓶は壊れていた」という「結果・状态的解釈」とで曖昧である。それに対して、Huddleston によれば、(24b) のように動作主を表す by-句を伴った受動文には「その花瓶はジョンに

(よって)壊された」という「動的解釈」しか持たない、即ち(24b)は動詞受動であることになる。逆に言えば、形容詞受動には動作主を表すby-句は伴わないということになる。

次に統語的な違いとしては、まず形容詞受動は(S構造で)形容詞と同じ分布を示す。これは形容詞受動の受動分詞が語彙部門で形容詞化されたものであることからの当然の帰結である。それは具体的には次のような性質として現れる。

1. a broken box, a well educated man などのように名詞を前位修飾できる。
2. become, look, remain, seem, sound などの形容詞句を補部にとる動詞の補部の位置に生起する: Celia seemed surprised.
3. 否定の接頭辞 un- が付加できる: The parcel was unopened.
4. very tired, extremely surprised のように程度の副詞によって修飾可能である。
5. 非派生形容詞句と等位接続が可能である: The box was dirty and broken.

また by-句以外の PP と共起することが多く、動作主を表す by-句とは共起しない。これらの動詞には心理動詞 (psych-verbs) が多い。

- (25) a. John is interested in linguistics.
 b. Mary is pleased with her son's arrival.
 c. We were shocked at his death.

したがって、動作主を表す by-句が共起する場合は動詞受動であることになる。例えば、次のような例は「動作受動」の解釈しかなく、(25)の心理動詞の用法とは異なる「行為動詞」の例であると考えられる。

- (26) a. John always tries to please us.
 b. We are always pleased by John.
 (27) a. Stop annoying us, Dorothy.
 b. We hate being annoyed by Dorothy.

そのことは、動作主を表す by-句を伴った 'be'-受動分詞が(28)のように非派生形容詞句と等位接続できないことや、(29)のように seem, look などの動詞の補部に生起できないことからわかる。

- (28) a.*The glass is dirty and broken by vandals.
 b.*The turkey was good and cooked by Tom.
 c.*Mike was annoyed and sad by them.

- (29) a.*The radio seems damaged by my daughter.
 b.*Everything looks packed by my father.
 c.*John sounded annoyed by Dorothy.

しかしながら、全ての by-句が生起しないわけではないことに注意したい。形容詞受動にも by-句が伴う場合もある。それは、前置詞 by の目的語が無生物を表す名詞句である場合である。こうした by-句は受動文に特有の動作主を表す by-句ではないことに注意。

- (30) a. She remained unconvinced by the evidence.
 b. John seemed humiliated by the disclosures.
 c. I was very hurt by your remark.
 d. The poet seemed more inspired by the dinner than the sunset.

Grimshaw (1990: 113-4) も形容詞受動に by-句が生起するとして、次のような例を挙げている。

- (31) a. Fred remains completely unperturbed by his student's behavior.
 b. Fred seems unworried by the situation.

Grimshaw はこうした形容詞受動に生じる by-句は、名詞句などに生じる by-句などと同じく、純粋な付加部 (adjunct) であり、動詞受動に生じる動作主を表す by-句 (Grimshaw は「項一付加部」(a-adjunct) と呼んでいる) とは別のものであるとしている。

また形容詞受動は語彙規則によって生成され、D構造において形容詞と同じ構造しかとることができないことから、それ以外の構造をとる受動文があればそれは動詞受動であるということがわかる。一般に形容詞は(32)が示すように、CP, IP, PP を補部にとることは可能だが、(33)が示すように、NP, AP を補部とすることはないので、形容詞受動において受動分詞に直接 NP, AP が後続することはない。

- (32) a. I'm afraid [_{CP} that he won't come].
 Children is eager [_{CP} for Christmas to come soon].
 b. John_i is certain [_{IP} _{t_i} to win the race].
 It_i is likely [_{IP} _{t_i} to rain].
 c. I'm proud [_{PP} of my son].
 We are familiar [_{PP} with the tradition].
 (33) a.*Mary is proud [_{NP} her son].
 b.*It is obvious [_{AP} aware of the fact].

したがって、二重目的語構文の受動態のように NP が受動分詞に直接後続するようなものは、形容詞受動では許されないことになる。

- (34) a. *John looks given first prize every time we have a contest.
b. *John seems told the secret.

さらに形容詞受動は、その派生に關する語彙規則である APF 自体の性質から局所性 (locality) を示す。この局所性とは、APF の入力となる動詞の項しか派生形としての形容詞受動の主語にはできないということであり、ECM 補部 (35) や小節の補部の主語 (36) や、項ではないイディオムの一部 (37) を派生主語にすることはないということである。

- (35) a. *John_i sounds considered [_t to be a scoundrel].
b. *Nixon_i acted found [_t to be not guilty].
c. *John_i is unknown [_t to be a communist].
d. *John_i remained unbelieved [_t to have quit smoking]. (Bresnan 1982: 65)
- (36) a. *Teddy already acted [_t elected (as) President].
Cf. Teddy already acted as President.
b. ?John seems considered [_t a fool].
- (37) a. *Tabs have remained kept on Mary since last month.
b. *Advantage sounds easily taken of John. (Wasow 1977: 345)
c. *Heed became paid to such warnings.
d. *Not much headway seems made today. (Levin-Rappaport 1986: 626)

それに対して、動詞受動においては受動分詞はあくまで動詞 V であり、受動文は統語変形 (具体的には NP 移動) によって派生されるので、形容詞受動に見られるこうした局所性を示さないで、S 構造で NP が直接後続する二重目的語をとる動詞の受動態や、ECM 構文、小節を補部にとる動詞の受動態が許される。

- (38) a. John is given first prize every time we have a contest.
b. John was told the secret.
Cf. *John was untold (the secret)./The secret was untold.

- (39) a. John was considered (to be) a scoundrel.
b. Nixon was found to be not guilty.
c. John is known to be a communist.
d. Smith is believed to have fled the country. (Levin-Rappaport 1986: 626)
- (40) a. John is considered a fool.
b. Mary was elected President.

またイディオムについては、統語変形である移動規則は統語構造上の性質ではない「項-非項」という区別に対しては盲目的な適用を受けるために、イディオムの一部を主語とする受動態も可能である。

- (41) a. Tabs have been kept on Mary (by the FBI) since last month.
b. Advantage is easily taken of Bill.
c. Heed was paid to such warnings.
d. Little attention is paid to boring lectures.
e. The baby was thrown out with the bathwater. (cf. Lasnik-Fiengo 1974: 541)

2.2 以上の事実を考慮に入れて、今後は 'get'-受動文を検討してみよう。上で 'get' 受動態の多くは実は形容詞受動の例であることを指摘したが、もしも動詞受動としか考えられないような場合が、'get'-受動文の存在が見られれば、少なくとも補文をとる構造を考える必要がある根拠があるということになる。

ここで、次の文を見てもらいたい。

- (42) a. John got his feet wet.
b. His feet got very wet.

(42a) は他動詞 get の使役動詞 (causative) 用法であり、get が補部として小節をとったものである。それに対し、Haegeman の分析に従えば、(42b) は (42a) の非対格動詞バージョンである。その構造は次のようなものになる。

- (42) c. [_{IP} [his feet]_i got [_{SC} _t [_{AP} wet]]]

このように Haegeman の分析は受動分詞を主要部とする VP だけでなく、(42c) のような AP についても成り立つ。しかしながら、このことは何も 'get'-受動態に限られたことではなく、通常の 'be'-受動文にも見られることであり get と同じように be 動詞の後ろにも AP が生じるため、動詞受動と形容詞受動で、後述の特殊な場合を除いては、基本的には常に曖昧であるとい

うことになる。

ここで一つ問題が生じる。先に見たように 'be'-受動文には変形によって派生されるいわゆる「動詞受動」と受動分詞が語彙部門で派生される「形容詞受動」の二種類があるが、このように get にも自動詞として形容詞句を補部にとる構文もあるとすると、'get'-受動文の受動分詞が全て「形容詞受動」である可能性があるということになる。そしてもしそれが正しいのならば、'get'-受動文は全て get+形容詞句として生成されることになり、前節のような小節を補文とする複文分析を仮定する必要性は無いことになる。

実際、'get'-受動文と言われているものでも、このような観点から見た場合、そこに現れている受動分詞は実際には形容詞であり、'get'-受動文というよりもむしろ「get+形容詞句 (AP)」と見なした方がよいと思われるものが多々ある。例えば、Quirk *et al.* (1985: 161) は次のような例を「get+形容詞句」として挙げて、いわゆる 'get'-受動文とは混同しない方がよいとしている。

- (43) a. We are getting bogged down in all sorts of problems.
 b. I have to get dressed before eight o'clock.
 c. I don't want to get mixed up with the police again.
 d. Your argument gets a bit confused here.
- (44) a. Don't get so excited!
 b. George got interested in electricity.
 c. I got a bit drunk once or twice.
 (Quirk *et al.* 1985: 161)

また、'get'-受動文について比較的詳しく調査した Granger (1983: 192-196) が 'get'-受動文として挙げている例においても、次のようにその大部分が形容詞受動の例である。

- (45) a. At least they don't get very bored.
 b. But I would also point out to the honourable gentleman in case he gets all carried away with the point.
 c. I'm sorry, I always get confused.
 d. I think the awful thing actually about getting engaged is having all your married friends around who tell you about married life.

- e. We don't want anything bigger until we've got two children and we've got rid of the lodgers.
 f. Cooper starts to jab in and they get tied up here.
 g. I was getting very tired.
 h. I soon got used to using it.

これらの例について言えることは、これらがどれも Wasow (1977) などで行われている形容詞受動の特徴を備えていることである。

しかしながら以下に示すように、'get'-受動文の中には動詞受動であるとしか考えられないものが有ることも事実である。そこで、動詞受動のみが現れ得るような構文について 'get'-受動文を見て行くことにする。まず、二重目的語構文をとる動詞も 'get'-受動文に現れ得る。

- (46) a.?John gets given first prize every time we have a contest.
 b. John got told the secret.
- (47) a. He got taught a lesson. [= 'it served him right'] (Quirk *et al.* 1985)
 b. I got given a nice book. (Chalker 1990)
 c. I worked for two hours a day and got paid the full amount. (Granger 1983: 194, (520))

こうした事実は、'get'-受動文にも動詞受動があることの強い証拠としてよいだろう。次に局所性に関してであるが、これに関しては、'be'-受動文の動詞受動とは異なり、ECM 補文と小節補文をとる動詞は一般に 'get'-受動文にならない。まず ECM 補文をとる例を見る。

- (48) a.*John got considered to be a scoundrel.
 b.*Bill got believed (by everyone) to be generous.
 c.*Nixon finally got found to be not guilty.

次に小節を補部とする例を見る。

- (49) a.?*Teddy finally got elected President.
 b.*John got considered a fool.
- (50) a.*John got considered worthy of confidence.

さらに先述したように動詞句イディオムの一部を主語

とする 'get'-受動文も存在しない。

- (51) a. *Heed got paid to our warning. (Lasnik-Fiengo 1974: 554)
 b. *Advantage got taken of Bill by Harry. (R. Lakoff 1972: 152)
 c. *Tabs got kept on those radicals. (R. Lakoff 1972: 152)

次の 'be'-受動文と比較せよ。

- (52) a. Heed was paid to our warning.
 b. Advantage was taken of Bill by Harry.
 c. Tabs were kept on those radicals.

これらの事実は先の二重目的語をとる動詞に関する事実と明らかに矛盾する。なぜなら、'get'-受動文が動詞受動を許すならば、'be'-受動文と同じようにこうした ECM 補部や小節を補部にとる動詞の 'get'-受動文やイディオムの一部を主語とする 'get'-受動文も許されるはずだからである。そしてこの事実はまた Haegeman が仮定する小節分析にとっても問題となる。それは再三指摘しているように Haegeman の分析では 'get'-受動文も 'be'-受動文と同じ統語的分布を示すことを予測するからである。こうした 'get'-受動文がなぜ非文法的なのかについては、少し後にその原因を考察する。

以上、本節では、'get'-受動文のなかには形容詞受動として分析できるものが多々あるが、少なくとも 'get' 受動態が二重目的語構文に見られるという事実から、形容詞受動で全てを分析することはできず、動詞受動である場合も存在するというを示した。そうすると、動詞受動の 'get'-受動文には、get と受動分詞の二つの動詞が存在することになり、全体は複文構造であることになる。

なお以下、本稿では形容詞受動を補部にとる「get+過去分詞」構文は通常の「get+形容詞」の構文と同じものと見なして考察の対象外とし、動詞受動の 'get'-受動文のみを議論の対象としていく。

3. 'get'-受動文と by-句

ここでは、'get'-受動文における受動分詞に関する制約について見る前に、もう一つ Haegeman の分析を支持する事実を簡単に検討することにしたい。

さて、Haegeman の小節分析は他にも次のような事

実を予測する。すなわち、受動分詞を補文の小節内にあると仮定するので、(53)に示すように get とは無関係に動作主 (Agent) を表す by-句が 'get'-受動文においても随意的に生起可能であることを予測する。

- (53) a. John got [his girlfriend invited (by all his friends)].
 b. [His girlfriend]_i got [_t invited _t by all his friends]. (Haegeman's (38b))

ところが、'get'-受動文については、一般に、'be'-受動文とはちがひ、能動文での主語を表す by-句が生起しにくいことが、特に動作主となる生物が by-句に表れると容認性が落ちるとということが指摘されている。例えば Hatcher (1949: 435-6) や Granger (1983) は次のような動作主を表す by-句が生起している例を容認不可としている。

- (54) a. He got fired by the superintendent.
 b. He got run over by the man next door.

また他にも、Declerk (1991: 203) など一般に有生物の by-句は 'get'-受動文には生起しないとしている。

- (55) *The new Post Office got opened by the Minister last week.

しかしながら、(54) に関しては Siewierska (1984: 136) はこれらの例が完全に容認可能であるとしている。さらに、実際には 'get'-受動文に by-句一般が生起できないというのは誤りであり、by-句が生起している例は比較的多く見られる。

まず無生物を表す by-句の例を見る。

- (56) a. The cat got run over by a bus.
 b. Don't get misled by their promises. (Quirk *et al.* 1985: 827)
 c. Kevin got rejected by another firm. (Siewierska 1984: 135)

有生物の場合もある。

- (57) a. My cache of marijuana got found by Fido, the police dog. (Siewierska 1984: 135)
 b. Those who kill snakes get killed by snakes. (Jespersen 1954, IV: 109)
 c. He went to Africa and got eaten by a lion.

(OED s.v. eat)

さらには、人間を表すものも観察されている。

- (58) a. I always get talked to by strangers. (Halliday 1985: 150)
 b. James got caught (by the police).
 c. The picture got broken by the children.
 d. The children got punished by the teacher. (c.d. Palmer 1988: 90)
 e. Her camera got confiscated by the police.
 f. Each defendant's case got considered separately by the jury. (Washio 1989-90: 257)
 g. John got pushed aside by the guard. (Huddleston 1988: 127)
 h. The picture got broken by the children.
 i. The children got punished by the teacher. (h, i. Palmer 1988: 90)
 j. He got shot dead himself by the other four.

さらには by-句の名詞が不定名詞句になると容認性が上がるという指摘もある。

- (59) a. I got walked on by a rather large and muddy dog. (Chalker 1990: 159)
 b. I got walked on by a rather large and muddy boxer dog. (Granger 1983: 194)
 c. He got run over by a drunken driver. (Granger 1983: 194)

これらの 'get'-受動文は対応する能動態とほぼ同義であり、動作受動の解釈を受けるもので、そこに生起する by-句は明らかに「動作主」の解釈を受けるものであるように思われる。したがって、動作主を表す by-句の生起に関しては、'be'-受動文と同じであるとしてよいと思われる。この点に関しては複文構造を仮定する Haegeman の分析は正しい予測をする。そして、'get'-受動文においては動作主が表されないものが多いというのはあくまでも傾向であり、その統語的性質によるものではないと考えるべきである。

したがって、前節でみたように 'get'-受動文に「動詞受動」があることと、by-句の生起が随意的であることから、'get'-受動文に複文構造を仮定し、'be'-受動文と本質的に同じ分析をする Haegeman の分析は基本的に正しいものであると言えるであろう。

4. 'get'受動文における受動分詞に関する制限

さて Haegeman の分析では、get の補部となる小節自体は本質的に 'be'-受動文と同じものであることから、通常の 'be'-受動文になれる動詞は全て同じく 'get'-受動文にもなれるということを予測するが、実際には 'get'-受動文には見られない、受動分詞に関するある種の制限があることがいくつかの文献で指摘されている。本節ではそうした制限について考察する。

4.1 さて第2節で、ECM 補文と小節補文をとる動詞は一般に 'get'-受動にならないこと、またイディオムの一部を主語とする 'get'-受動文も無いことを見た。

- (60) a.*John got considered to be a scoundrel.
 b.*Bill got believed (by everyone) to be a generous.
 c.*Nixon finally got found to be not guilty.
 (61) a.?*Teddy finally got elected President.
 b.*John got considered a fool.
 c.*John got considered worthy of confidence.
 (62) a.*Heed got paid to our warning. (Lasnik-Fiengo 1974: 554)
 b.*Advantage got taken of Bill by Harry. (R. Lakoff 1971: 152)
 c.*Tabs got kept on those radicals. (R. Lakoff 1971: 152)

さて、これらの構文が 'get'-受動文の補部に生起しないことは、Haegeman の小節分析にとって大きな問題になる可能性があることを指摘しておいたが、必ずしもそうは言えない可能性もある。

まず、第1節でも見たようにこれには別の意味的要因が関係している。believe, consider, find などこの構文をとる動詞は状態動詞であり、補文をとらなくても 'get'-受動文には生起しないことがいくつかの文献で指摘されている。cf. Declerck 1991, Bing 1989。

- (63) a.*The news got known (by/to everybody)
 b.*His theories got understood (by the most famous scientists only).
 c.*She got hated for her arrogance. (Declerck 1991: 203)
 d.*The criminal gets known to the police. (Bing 1989: 111)

状態動詞が 'get'-受動文に用いられないことは、状態動詞の目的語が一般に「被動目的語」(affected patient/theme)ではないことに関係しているようである。

4.2 次に、動的動詞であっても 'get'-受動文の受動分詞としては生起できないものがあることも指摘されている。cf. Declark (1991)

- (64) a.*The bridge got built in 1980. (Declark 1991: 203)
 b.*The church got built in 1604. (Bing 1989: 111)
 c.*The rag got made in China. (Bing 1989: 111)

もちろんこれらの例に対応する 'be'-受動文は完全に文法的である。ここで注意したいのは、これらの例に見られる受動分詞が「達成動詞」あるいは「創造の動詞」(creation verbs)のそれであることである。

これに関連して指摘しておきたいことは、'get'-受動文では、主語が「予め存在していて、受動分詞となる動詞によって何らかの影響を受けた」と考えられるものでなくてはならないという指摘である。(R. Lakoff 1971)

- (65) a.*A new house got built.
 b. Our house is getting remodeled.
 (66) a.*Three picture got pained (by the child).
 b. The wall of my room got painted red.

さらに次のような「行為動詞」も 'get'-受動文では容認性が低い。

- (67) a.*?The forbidden literature got read (by most of the students). (Declark 1991: 203)
 b.*The lesson got read by a choirboy.
 c.*The letter got written by a poet. (Palmer 1988: 90)

次の Quirk *et al.* (1985: 161) の挙げる例文におけるコントラストも参照。

- (68) a. He got taught a lesson. [= 'It served him right']
 b.?He got taught a lesson on the subjunctive (by our new teacher).

これは 'get'-受動文では主語が「何らかの変化・影響・損害を受けること」を表す必要があるためである。

- (69) This program has gotten pre-recorded. (R. Lakoff 1971)

「(これまで生番組だったのが今回は都合で)録画で作られてしまった」

(69)においては文の内容が話者にとって不利なことであることになっている。対応する 'be'-受動文にはこうした意味合いはまったく見られない。

4.3. また, Huddleston (1984: 445) は to-不定詞句を補部にとる動詞は 'get'-受動文になれないことを指摘している。

- (70) a.*Ed got heard to observe that the project would be a failure.
 b.*Jill got rumoured to be in Moscow.
 c.*That got assumed to be impossible. (cf. Huddleston 1988: 178)

他にも次のような例がある。

- (71) a.*John got considered to be a scoundrel.
 b.*Bill got believed (by everyone) to be generous.
 c.*John carelessly got known to be a communist.
 d.?Nixon finally got found to be not guilty.
 e.*The chair got found not to be comfortable.
 f.*The President got expected (by everyone) to resign soon.
 g.*He got suspected to have already received the bribe.
 h.*They got proved by Jim to be innocent.

これらの例文は前節で見た ECM 補文をとる動詞が用いられている例であり、形容詞受動になれないものである。この制限は一見統語的なもののように思われるかもしれないが、これらの動詞はどれも状態動詞であることに注意したい。したがって、これらの 'get'-受動文が許されないのは、先に見た 'get'-受動文には状態動詞は用いられないということによって排除される場合と同じとして考えてもよさそうである。では, Huddleston の述べるような制約は本当に存在しないと言ってよいのであろうか。次の例文を見てみよう。

- (72) a.*Jill got rumoured to be in Moscow.
 b.*The President got reported to resign.
 c.*John got claimed to be only person to know it.
 d.*There got reported to be many casualties.

これらの動詞も ECM 補文をとる動詞だが、前述の例とは異なり状態動詞とは言えないものである。にもかかわらず、その'get'-受動文はやはり非文法的となる。

さて補文に to-不定詞句をとる動詞は何もこれらの ECM 動詞に限られているわけではない。他にも force, persuade などの非状態動詞もある。こうした動詞は ECM 補文ではなく「目的語+IP」を補部にとるもので、この目的語は動詞から θ -役割を付与されるために、ECM 補文をとる動詞とは異なり、形容詞受動を許すものである。cf. Bresnan (1982)

- (73) a.?John remained unpersuaded to quit smoking.
 b.*John remained unbelieved to have quit smoking.

こうした動詞の'get'-受動文はインフォーマントによれば完全に文法的ではないにしろ幾分その容認性が上がるようである。

- (74) a.?The President got persuaded to resign.
 b.?The soldiers got ordered (by the officer) to withdraw.
 c.?The teacher got asked to attend the party.
 d.?Mary got told not to beat the dog.
 e.??I got forced to marry the girl by her father.
 f.? John got persuaded to quit smoking.
 cf.*? John got believed to have quit smoking.

ここで、目的語の後に to-不定詞以外の補部をとる動詞についても'get'-受動文に成り得るかどうかを調べてみたので、その結果を以下に報告しておく。まず原形不定詞補文をとる知覚動詞 (perception verbs) の'get'-受動文であるが、これらは ECM 補文に等しい小節を補部とする動詞であり、また状態動詞であるので非文となるようである。

- (75) a.*John got heard to speak some exotic language.
 b.*Ed got heard to observe that bureaucrats bribe easily.

- c.*We got seen to enter the church (by a minister).
 d.*He got seen by the police.
 e.*The earth got felt to tremble.

ただ補文が V-ing 形となると容認性が上がるのかもしれない。

- (76) ? They got seen taking a bath.

次に使役動詞についてであるが、これも非文となる。

- (77) a.*The elephant got caused to die by George.
 b.*The elephant's death got caused by George's shooting.
 cf.? The elephant's death will get caused by the destruction of the zoo.
 c.*The public got made to take notice of Sue.
 d.*I got made to repeat the message.

補部に from V-ing をとるいわゆる否定使役動詞に関しても、その'get'-受動文は一般に非文になるようである。

- (78) a.*Jack got prevented from kissing the gorilla.
 b.*Jack got prohibited from carrying weapons.
 c.*Jack got dissuaded from kissing the forilla.
 d.?He got stopped from embarking.
 e.?We got kept from winning.
 f.? He will get deterred from embarking.
 g.?We got restrained from jumping off the wall.

5. 主語に対する制限

Haegeman の分析では、基底構造においては主文の主語の位置が非 θ -位置であることになる。これに関して Haegeman が挙げているのは、能格動詞の get の主語には「動作主性」が感じられないという事実のみである。cf. G. Lakoff (1970)

ところが、'get'-受動文の主語に関しては、それが何らかの θ 役割を持つのではないかということを示唆するような現象が見られる。

5.1. Haegeman の小節分析では、'get'-受動文は get が能格動詞であることから、D 構造において主文の主語の位置が非 θ -位置であることになる。これはちょう

ど、やはり非対格動詞の仲間である「繰り上げ述語」(raising predicate)の主語の位置が非 θ -位置であるのと同じである。さて、繰り上げ構文の主語の位置には θ -役割を必要としない要素である、虚辞の *there*, *it* などの指示性 (referentiality) を持たない名詞句が自由に生じることが知られている。また 'be' 受動文の主語の位置も非 θ -位置であるが、それも繰り上げ構文の主語の位置と同じ性質を示す。

- (79) a. It seems that John is not guilty.
 b. It was believed (by everyone) that John had succeeded in the exam.
- (80) a. There were many students arrested by the police.
 b. There seem to be many students arrested by the police. (Washio 1989-90: 261, fn. 14.)
 c. There is believed to be many students arrested by the police.

それに対して 'get'-受動文においてはこれらの虚辞が主語の位置に生じることはない。

- (81) a. *It got believed (by everyone) that John had succeeded in the exam.
 b. *There got many students arrested by the police. (Washio 1989-90: 261)
 c. *There seem to get many students arrested by the police.

こうした例は Haegeman の分析にとって一つの問題となるが、このように 'get'-受動文では 'be'-受動文とは異なり指示対象を持たない虚辞が主語となることがないという事実も、これらの名詞句が「被動性」を付与されないということで排除されると言える。

5.2. さらに、前述のように動詞句イディオムの一部 (idiom chunks) が主語になる場合についても同じことが言える。

- (83) a. Heed was paid to our warning.
 b. Advantage was taken of Bill by Harry.
 c. Tabs were kept on those radicals.
- (84) a. *Heed got paid to our warning. (Lasnik-Fiengo 1974: 554)
 b. *Advantage got taken of Bill by Harry. (R. Lakoff 1971: 152)

- c. *Tabs got kept on those radicals. (R. Lakoff 1971: 152)

こうしたイディオムの一部は通常の名詞句とは異なり、指示性 (referentiality) を持たないし、イディオム全体が一種の語彙項目となるために、その一部となる名詞には θ -役割は与えられないと考えられる。さらに当然のことながら、指示性を持たない名詞句が動詞によって影響を受け変化するとは考えられないことから「被動性の制約」によってその非文法性が説明されるとしてよいであろう。

さて、こうした事実は、'get' 受動文の主語の位置が Haegeman の分析とは違って θ -位置である、すなわち D 構造で空ではなく語彙的名詞句が存在していることを示唆していると考えられるかもしれない。しかし、その場合には *get* の補文は RPO を主語とする小節にならねばならないが、そういう分析では「PRO は統率されてはならない」という束縛理論の PRO 定理 (PRO theorem) の違反が生じ問題である。このような分析を提案するものに Hoshi (1991) があるが、ここでは取り上げない。

5.3. さて、第1節でも述べたように、'get'-受動文の主語にはある種の「動作主性」(agentivity) を持つことを示唆する事実がある。まず、'get'-受動文の主語が「動作主指向の副詞」の先行詞・被修飾部となることがあった。この場合 *get* の主語は Agent でなければならないが、これは D 構造での主語に付与されるはずである。さらに、'get'-受動文の主語が「理由を表す不定詞句」(rationale clause) の PRO のコントローラとなるということがあった。そして、一般に PRO のコントローラになるのは θ -位置にある NP であるとされる。こうした事実は、ともに 'get'-受動文の D 構造での主語の位置を非 θ 位置として分析する Haegeman の分析にとっての問題となるように思われるが、動作主指向の副詞については Jackendoff (1972, 1975) などと言うように S 構造に基づいて解釈されるとすれば問題ではなくなる可能性がある。また、目的を表す不定詞句のコントローラに関しても Williams (1987), Grimshaw (1990) の主張するように event control であるとすれば、主語の θ -理論的性質にかかわらず説明可能であることになる。

したがって、これらの事実は Haegeman の分析を放棄する根拠とはならないと言える。

6. 中間態構文と 'get'-受動文の特徴との比較

「被動性の制約」とはもともと名詞句内での NP 移動によって派生されると考えられる受動名詞句における次のような文法性の差異を説明するために導入された変形の適用に関する意味的条件である。cf. Anderson (1979), Fiengo (1980), Jaeggli (1986), Tenny (1987, 1992)

- (85) a. the army's destruction of the city
 b. the city's destruction (by the army)
 (86) a. John's avoidance of Bill
 b.*Bill's avoidance (by John)

Anderson (1979) は (85b) の受動名詞句が文法的であるのに対し、それと同じ統語構造をしているにもかかわらず非文法的となる (86b) との差を説明するために、名詞句内で適用される NP 前置規則は「ある行為の影響を受ける」(affected) NP に対してのみ適用できるという主旨の条件を提案した。

もう一つこの制約が関与するとされる構文に中間態構文 (middle construction) があるが、それは次のようなものである。

- (87) a. The wall paints easily.
 b. They paint the wall easily.
 c. They paint the wall white.
 (88) a.*French acquires easily.
 b. They acquire French easily.
 c.** They acquire French abundant.

Keyser and Roeper (1984) によれば、中間態構文を取り得るのは (87) のように NP 移動を受ける目的語が動詞の表す行為の影響を受ける場合のみであり、(88) の French のように acquire することで全く影響を受けないような場合は、中間態構文にはならないと示唆している。(87) の the wall が paint という行為によって影響を受けることは (87c) のような結果の二次述語 (resultative secondary predicate) を取り得ることからも首肯されるだろう。(88) の acquire では目的語が影響を受けないことから行為の結果という要素が動詞の意味と相入れず (88c) は非文となる。

さて、このように NP 移動によって生じる派生主語が「影響を受けるもの」でなくてはならないという現象があるわけだが、これはこれまでに見てきた 'get'-受動文の場合にも当てはまるように思われる。そして、こ

の「被動性」という概念は動詞とその目的語の間に成り立つものであり、本質的には動詞の意味的性質に依存するものであるということが言える。したがって、もしこの二つの構文が同一の制約に従うのならば、そこに用いることのできる動詞類も一致するはずである。そこでここでは、「被動性の制約」に従うとされる中間態構文に関してどのような動詞類が生起可能かを見ることで、'get'-受動文と比較してみたい。

中間態構文とは次の (89b) のような文で、対応する (89a) のような他動詞構文の目的語を主語とするもので、その主語の一般的特徴を述べる状態文 (statives) のことを言う。

- (89) a. The sailors sank the boat.
 b. This boat sinks easily.

この構文では一般に副詞表現が必要とされる。

- (90) a. This book sells well.
 b. These books read easily (for children).
 (91) a.*This book sells.
 b.*These books read.

そして中間態構文はいわゆる次の「被動性の制約」(Affectedness Constraint) に従う。

- (92) 動詞の表す行為・過程によって影響を受けて状態変化を生じたことを意味する目的語、すなわち「被動目的語」(affected object) のみが中間態構文の主語になれる。

さて、Roberts (1987) は中間態構文に関して「被動目的語」という概念を明確化するために、「被動主題」(affected Theme) であると再定義し、さらに Vendler (1967), Dowty (1979) にならって英語の動詞をその相的特徴から大きく (a) 状態動詞、(b) 行為動詞、(c) 達成動詞、(d) 完遂動詞の 4 つに分類し、この「被動主題」を目的語(直接内項)(direct-internal argument) に付与するのは (d) の完遂動詞のみであるという。

- (93) Roberts (1987) による動詞の分類:
 a) 状態動詞 (stative verbs)
 基底主語は常に Experiencer: 内項は Theme
 b) 行為動詞 (activity verbs)
 基底主語は Agent
 c) 達成動詞 (achievement verbs)
 基底主語は Agent/Theme で曖昧

- d) 完遂動詞 (accomplishment verbs)
基底主語は常に Agent: 内項は Theme

そして、中間態動詞形成規則 (Middle Formation Rule) という語彙規則が、「被動主題」を外項化するというものであると規定する。

この制約は以下のような事実を説明する。まず状態動詞は目的語に「被動主題」の θ -役割を付与しないので中間態構文に生起できない。これは 'get'-受動文と同じである。

- (94) a.*The answer knows easily.
b.*The arguments assume easily.
c.*French acquires easily. (Fagan 1988: 199)
d.*The mountains see easily.
(Roberts 1987: 194)

また、動詞句イディオムの一部は複合動詞の一部であり、独立して θ -役割を付与されないので、それを主語とする中間態構文は非文であるが、これも 'get'-受動文と同じである。(以下例文は Roberts から)

- (95) *Advantage takes of John easily.

さらに、知覚動詞や ECM 補文・小節をと動詞などによる他動詞構文の補文の主語を主語とする中間態構文は非文であるが、これは、これらの派生主語が「被動主題」ではないからである。そして、これに関しても 'get'-受動文と同じ結果になる。

- (96) a.*John sees singing easily.
b.*John hears (to) speak to himself easily.
(97) a.*John believes to be a fool easily.
b.*This theorem proves to be true easily,
(98) a.*These problems consider easy at MIT.
b.*This dog calls Spot easily.

もっとも、これらの中間態構文の主語は、対応する他動詞構文において動詞から θ -役割を付与されないからである。これは前述のように中間態動詞形成規則が語彙規則であり、その動詞の述語一項構造 (predicate-argument structure) に対してしか作用しないという、語彙規則の局所性 (locality) から説明されるとした方が良いかもしれない。

さらに、「主題」ではなく「目標」(Goal) を直接目的語に付与する二重目的語をとる授与動詞も中間態構文に生起できないこと、同様に、「受益者」

(Benefactive) を付与される目的語も中間態構文にならないこともうまく説明できる。

- (99) a.*Orphans give presents easily at Christmas.
b.*Libraries send books best in boxes.
(100) *Mary bakes a cake easily.

ただし、二重目的語構文の目的語が「影響を受けた目標」(affected Goal) であるという者もいる。cf. Wilkins (1987), Jackendoff (1987, 1990)

- (101) a. John gave Bill the book.
b. John gave the book to Bill.

それは (101b) では本の授与が成されたことは表されるが、Bill が必ずしもそれを受け取ったことが含意されないのに対して、(101a) では Bill が本を所有したことが含意され、Bill の状態が変化したと言えるからである。この場合、(100) のような例は「被動性の制約」を満たしてはいるが、中間態構文にはなれないということになる。しかしながら、こうした例は「被動性の制約」の例外とは必ずしもならない。この場合、この制約は中間態構文になるための必要条件にすぎないと考えるべきである。

さて、'get'-受動文は二重目的語をとる動詞を許したことを思い出してもらいたい。ここにきてこれまで見てきたような 'get'-受動文と中間態構文の間の平行性がくずれることになる。以上、「被動性の制約」に従うとされる中間態構文と 'get'-受動文との間にかかなりの平行性が見られることを検証した。そして二重目的語をとる動詞に関してのみは、この平行性が崩れることを観察した。それを除けば 'get'-受動文もほぼ「被動性の制約」に従うものとみなしてよいと結論づけられる。

7. 結 語

以上、本稿では、まず、'get'-受動文は Haegeman (1985) の提案するような小節を補部とする複文構造を持つこと、したがって、統語的には、本質的に 'be'-受動文と異なることはないことを見た。それは、'get'-受動文にも「形容詞受動」を補部とするものと「動詞受動」を補部とするものの両方があること、「動詞受動」においては 'be'-受動文と同じように動作主を表す by-句が随意的に生起可能であることによってわかることを示した。さらに、'get'-受動文に見られるいくつ

かの特殊性は 'get'-受動文の主語がいわゆる「被動性の制約」に従っていることから説明可能であることを示した。そして、Roberts (1987) の主張に従って、それが 'get'-受動文に生起可能な動詞類に対するある種の制限をも説明する可能性があることを述べた。そのことは Roberts の示した中間態構文に生起可能な動詞類との平行性からも支持されることを示した。

このように、本稿では、'get'-受動文に見られる一連の制約は、そのかなりの部分が「被動性の制約」によって説明可能であることを見てきた。それは中間態構文における生起可能な動詞類と 'get'-受動文に生起可能な動詞類がほぼ重なり合うことからある程度支持されると思われる。ただし、二重目的語をとる動詞に関してはこの平行性が成り立たないこともわかった。

しかしながら、中間態構文に見られる制限が「被動性の制約」によって全て説明できるかどうかには問題があることも指摘されている。例えば、Fagan (1992) は Roberts (1987) の主張には反例が存在すると指摘している。cf. also Carrier and Randall (1992)

- (102) a. This book reads well.
b. This book sells well.

Fagan はこれらの動詞は「行為動詞」であって「完遂動詞」ではないとし、Roberts の制約にとつての反例となるとしている。

また Fagan によれば次のような例の非文法性は「被動性の制約」では説明できない。

- (103) *This book buys well.

さらに「被動性の制約」と「被動性」自体の概念については不明な点が多い。例えば、Anderson (1979), Keyser and Roeper (1984), Tenny (1987) などは、この制約を NP 移動という統語変形に対する制約としてとらえているが、最近では Grimshaw (1990), Fagan (1988, 1992), Zubizarreta (1987) などは受動名詞句や中間態構文は語彙規則によって派生されるべきであるとしている。'get'-受動文に関しては統語変形による派生が必要なことは本稿で示したとおりである。したがって「被動性の制約」が文法においてどの様な性格を持つものかがはっきりしないという問題がある。今後はこうした問題について更なる考察が必要であると思われる。

註

- 1 本稿の作成にあたっては、インフォーマントとして Jeff Ryan 氏の協力を得ている。ここに記して感謝したい。

参考文献

- Anderson, Mona (1979) "Noun phrase structure." Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Baker, Mark (1988) *Incorporation: a Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago; University of Chicago Press.
- Baker, Mark, Kyle Johnson, and Ian Roberts (1989) "Passive argument raised." *Linguistic Inquiry* 20: 219-252.
- Bing, Janet Mueller (1989) *Grammar Guide: English Grammar in Context*, New Jersey: Prentice-Hall.
- Bresnan, Joan (1982) "The passive in lexical theory." In *The Mental Representation of Grammatical Relations* (J. Bresnan ed.). Cambridge, MA: MIT Press.
- Browning (1987) "Null operator constructions." Unpublished doctoral dissertation. MIT.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian syntax: a Government-Binding Approach*. Dordrecht: Reidel.
- Chalker, Sylvia (1990) *English Grammar Word by Word*. Surrey, UK: Nelson.
- Chomsky, Noam (1977) "On wh-movement." In *Formal Syntax* (P. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian, eds.). New York; Academic Press.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, Cambridge, MA; MIT Press.
- Chomsky, Noam (1991) "Some notes on economy of derivation and representation." In *Principles and Parameters in Comparative Grammar* (Robert Freidin, ed.). MIT Press.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The argument structure and syntactic structure of resultatives." *Linguistic Inquiry* 23: 173-234.

- Davies, E. (1986) *The English Imperative*. London, Croom Helm.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo; Kaitakusha.
- Dixon, R.M.W. (1991) *A New Approach to English Grammar: on Semantic Principles*. Oxford; Clarendon Press.
- Dowty, David R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht; Reidel.
- Fagan, Sarah M.B. (1988) "The English middle" *Linguistic Inquiry* 19: 181-204.
- Fagan, Sarah M.B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions: a Study with Special Reference to German*, London; CUP.
- Frawley, William (1992) *Linguistic Semantics*. Hillsdale, NJ; Lawrence Erlbaum Associates.
- Granger, Sylviane (1983) *The Be+Past Participle Construction in Spoken English: with Special Emphasis on the Passive*. Amsterdam; North-Holland.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. Cambridge, MA; MIT Press
- Haegeman, Liliane (1985) "The *get*-passive and Burzio's generalization." *Lingua* 66: 53-77.
- Hasegawa, Kinsuke (1968) "The passive construction in English." *Language* 44: 230-243.
- Hoshi, Hiroto (1991) "The Generalized Projection Principle and its implications for passive constructions." *Journal of Japanese Linguistics* 13: 53-89.
- Huddleston, Rodney D. (1971) *The Sentences in Written English*. Cambridge; CUP.
- Huddleston, Rodney D. (1984) *An Introduction to the Grammar of English*. Cambridge; CUP.
- Huddleston, Rodney D. (1988) *English Grammar: An Outline*. Cambridge; CUP.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1975) "Tough and the trace theory of movement," *Linguistic Inquiry* 6: 437-464.
- Jackendoff, Ray (1987) "The status of thematic relations in linguistic theory." *Linguistic Inquiry* 18: 369-411.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jaeggli, Osvaldo (1986) "Passive," *Linguistic Inquiry* 17: 587-662.
- Keyser, Samuel J. and Thomas Roeper (1984) "On the middle and ergative constructions in English." *Linguistic Inquiry* 15: 381-416.
- 木下浩利 (1991) 『英語の動詞: 形とところ』九州大学出版会.
- 小西友七 (編) (1980) 『英語基本動詞辞典』研究社出版.
- Lakoff, George (1970) *Irregularity in Syntax*. New York; Holt-Reinhart.
- Lakoff, Robin (1971) "Passive resistance," *CSL* 7: 149-162.
- Lasnik, Howard (1992) "Case and expletives: Notes toward a parametric account." *Linguistic Inquiry* 23: 381-405.
- Lasnik, Howard and Robert Fiengo (1974) "Complement Object Deletion," *Linguistic Inquiry* 5: 535-572.
- Levin, Beth and Marka Rappaport (1986) "The formation of adjectival passives." *Linguistic Inquiry* 17: 623-663.
- Nakamura, Masaru (1991) "On 'null operator' constructions." In *Current English Linguistics in Japan* (Heizo Nakajima, ed.). The Hague; Mouton de Gruyter.
- Palmer, Frank. R. (1988) *The English Verb*, 2nd edn. London; Longman.
- Perlmutter, David (1970) "The two verbs *begin*." Roberts, Ian G. (1987) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*. Dordrecht; Foris.
- Stein, Gabriele (1979) *Studies in the Function of the Passive*. Tübingen; Gunter Narr Verlag.
- Stockwell, Robert P., Paul Schacter, and Barbara Hall Partee (1973) *The Major Syntactic Structures of English*. New York; Holt, Reinhart and Winston.
- Tenny, Carol Lee (1987) "Grammaticalizing aspect and affectedness." Doctoral dissertation, MIT.

- Tenny, Carol Lee (1992) "The aspectual interface hypothesis." In *Lexical Matters* (I.A. Sag. ed.). Stanford; CSLI Publications.
- Washio, Ryuichi (1989-90) "The Japanese passive," *The Linguistic Review* 6: 227-263.
- Wasow, Thomas (1977) "Transformations and the lexicon." In *Formal Syntax* (P. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian, eds.). New York; Academic Press.
- Wilkins, Wendy (1987) "On the linguistic function of event roles." *BLS* 13: 460-472.
- Williams, Edwin (1987) "Implicit arguments, the binding theory, and control." *NLLT* 5: 151-180.
- Zubizarreta, Maria Luisa (1987) *Levels of Representation in the Lexicon and in the Syntax*. Dordrecht; Foris.